

〔瑞雲舎、東京都港区高輪二一六一三六一五〇五、電話〇三
一五四四九一〇六五三、二〇〇三年一月一〇日、A四判、
三二頁、一五〇〇円〕

館野 正美 著

『吉益東洞『古書醫言』の研究』

わが国の漢方医学の特質は吉益東洞氏の業績を置いて語る
ことができない。明治の末に和田啓十郎氏が『醫界之鐵椎』
を世に問い漢方医学の復興を企図したときに、吉益氏の医説
を掲げて論陣を張った。和田氏に私淑した湯本求真氏がそれ
を受け継いで、大塚敬節氏をはじめ多くの門弟を輩出したと
きに、吉益氏の医説は日本を代表する伝統医学思想となつた
のである。

他の儒教文化圏に残る伝統医学と異なり、わが国の漢方医
学が西洋医学と両立しようとする思想的基盤を形成したのが、吉益
東洞氏がいまより約三世紀前にと考えた医説に負っているこ
とはようやく知られてきた。

本書は吉益氏の著書では話題とされることの少ない『古書
醫言』を取り上げて、現伝本と自筆本との比較をこころみ、
さらに吉益氏の有名な萬病一毒説や天命説に中国古典からす
る光を当てようとする意欲作である。吉益東洞氏はその強烈
な個性の故か、『葉微』でも『類聚方』でも一部を読んだだけ
で読者をして分かつた気にさせてしまう魔力を持っている。

しかしその思想的よりどころは評者を含めて意外に知られて
いない。

本書は第一部のテキスト編と第二部の医学思想編とから構
成されている。

著者のいう『古書醫言』の現伝本は、吉益南涯と北洲とに
よる校正後に文化十年に刊行された『古書醫言』であり、一
方では東洞氏自筆とされる順天堂大学所蔵の山崎文庫本があ
る。その間の異同を主に論じたものが第一部のテキスト編で
ある。資料批判を展開する著者の筆致は鮮やかに読者の興味
をつなぎ、資料の引用が繰り返されるのもまったく苦になら
ないほどである。

本書の白眉が第二部の医学思想編である。これは『古書醫
言』に引用された中国の典籍をたどることで吉益氏の古典解
釈を斟酌し、氏の医学思想の形成過程を追体験しようとする
意欲的な試みである。著者によれば吉益氏は単純に伝統医学
理論を全否定したわけではない。そこには吉益氏の人間的な
苦勞すらかいま見られるというのである。時代を率いた革命
的な思想家に共感しつつその歩みを跡付けるといふ手法は、
この孤獨な漢方家の雄姿を立体的に読者に伝えることに成功
している。

本書のごとく吉益東洞氏の思想を正面から解明しようとす
る正統的な研究の出現を歓迎したい。医学教育に漢方医学が
組み込まれるようになったという歴史的な壮挙は、発端をよ
くよくくだればほかでもない吉益東洞氏とその思想に行き着

くからである。思えば吉益氏について今日研究されねばならない主題は多岐にわたる。二十一世紀の新しい漢方医学を考える出発点として、まず本書を手がかりに吉益東洞氏の『古書醫言』から読み解いてみたいかがであろうか。

(秋葉 哲生)

(汲古書院、東京都千代田区飯田橋二一五一四 正吾ビル二階、電話〇三―三二六五―九七六四、二〇〇四年一月、A五判、三三三三頁、定価一二、〇〇〇円)

山崎 光夫 著

『ドンネルの男 北里柴三郎』

北里の生涯が克明に書かれた本書の表題に「ドンネルの男」と象徴的に加えられているが、時に雷が落ちるような雷親爺の意味でつけられていると同時に稲妻の様にきらめく北里博士の思考力と実践力も意味していると解釈すれば、ドンネルの男がより一段と巨人に相応しい生涯を象徴するように思われる。

筆者は三年前に中村桂子著「北里柴三郎」(本誌四七巻一号)を紹介しているが、今回は本書上下二巻(五八七頁)の紹介をすることになり、北里博士がどのように書かれているかを述べる。

先ず何といつても山崎氏の三十冊を超える著書の中でも最

も長編となっており、日本細菌学会誌の今年四月号(北里柴三郎博士生誕一五〇周年記念特別企画講演を所載)の裏表紙全面に東洋経済新報社が北里博士の写真も添えて著者渾身の長編小説と紹介している。学会誌に記念号とは言え出版広告とは極めて珍しい。出版社の自信と意気込みが窺われる。

山崎氏は北里博士には多年関心を持ち続けて来られたようで、二十年來の構想の後に書かれたと著者の話を北里博士の孫の北里一郎氏が紹介されている(日医ニュース一〇一五号)。一昨年出版されたある随筆風の小編の中で、恐らく三十三歳ごろから医師それも大学・病院・開業医と各科の臨床医、基礎医学者と広く会って来たと述べている事からも、多年の著作には医療・医学、薬学、民間薬としかもそれらを取り巻く社会の動きなど並々ならぬ幅広い範囲の内容からも今回の著作の素地は十分に出来上がりつつあったようで北里博士の生誕一五〇周年を期して多年の構想をまとめられたものと考えられる。しかも北里博士についての取材は極めて徹底したものであることは文面からも充分窺えるのである。

例えば小生にとつて感心した点は、明治二十七年(一八九四年)に英国領香港のペスト流行についてその前後の経緯と政府の対応など詳しく書かれており北里博士がペストの調査に出張するのである。現地でコッホ研究所での学識経験によりペスト菌を同定し発見を公表するのであるがその項で細菌のグラム染色についての記述がその発見に始まり手技は勿論その技術上の問題点にまで詳細に述べている事である。